

♪ゲンズブール「アコーディオン」その3(承前)♪

作詞作曲歌手以外にも映画監督俳優など様々な顔を持つゲンズブールですが、やはり何よりも作詞家、詩人としての才能が輝いています。今回は、音楽や恩寵、施しのイメージを散りばめつつストリートミュージシャンの悲哀を歌った1番のクープレとルフラン(リフレイン)の歌詞をフランス語の発音を含め丁寧に読んでみました。今回は2番と3番のクープレです。(以下歌詞引用)

《2番クープレ》

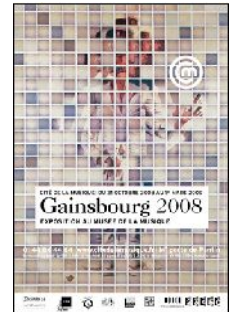
いつも一体だから
人に語りかける時には
メロディーを乗せる
アコーディオンに
静かな夜を過ごしたら
朝に送り込む
蛇腹に空気を少し
アコーディオンに

《3番クープレ》

時々やっつけると
小さな真珠貝のボタンを
上着から取って使う
アコーディオンに
ズボン吊りを借りては
吊り紐にするから
ズボンの支えは
アコーディオンに (歌詞引用ここまで)

下の文中に言及した

展示会入り口のポスター↓



「いつも一体」はフランス語で「キュレシュミーズ」で、日本語で言う「御神酒徳利」のような表現ですが「ケツ(尻)とシャツ」でインパクトのある俗語です。他にも強力な言葉、捻った表現、比喩表現の連発で、内容よりも音とイメージの炸裂を楽しむ歌詞です。

＝生きていれば古稀、アラエイで後期高齢者のゲンズブール＝

1991年3月2日に62才で亡くなったゲンズブールは1928年(昭和3年)4月2日の生まれです。渥美清、チャーリー・テンプレート、渋谷龍彦、ドクター中松、チェ・ゲバラ、アンディ・ウォーホルなどとほぼ同い年になります。ゲンズブール生誕80周年は、ジャック・ブレール没後30周年と並んで今年2008年のフランスのポピュラー音楽(ポップ・フランセーズ)、なかでも芸能(ヴァリエテ)寄り懐メロ(レトロ)な音楽の目玉商品になっています。新しい編集CDが発売されたり、ラジオでよく曲が流れたり、テレビの特番が組まれたりしています。モーツァルトの生誕250周年で1昨年いたるところでモーツァルトを耳にしたと同様の、もちろんモーツァルトに比べれば小規模な、そういう現象というか商業イベントが仕掛けられているのです。

その極め付けが10月の21日から始まり来年3月1日まで行われる展示会で、コンサート会場やコンセルヴァトワール(パリ音楽院)もあるパリの北東部のシテ・ドゥ・ラ・ミュージーク(音楽都市)の音楽博物館で開催されています。入り口にはカメラのレンズをこちらに向けた挑戦的な面構えのゲンズブールが待ち構えています。

展示会のPRポスターはモザイク状の小さな写真を並べたデザインで、ゲンズブールの多面性と

本質の掘りかたさを表しています。シテ・ドゥ・ラ・ミュージークを含む一帯は科学博物館や公園もあるヴェレット地域で、あまり日本の方は足を運ばない場所ですが、音楽好きの皆さんには博物館の常設展示も楽しめますし、今年から来年にかけてパリを訪問される方はぜひともいらしてはいかがでしょうか。映画「アメリカ」や「北ホテル」でお馴染みのサンマルタン運河の遊覧船に乗って行くこともできます。一面的で踏み込みが足りないとの評もありますが、フランス人は、こういう展示とか総括は本当に上手なのできっと素晴らしい出来だと思えます。(以下次号)

展示会入り口のディスプレイ↓



□お知らせ・・・

「シャンソンとアコーディオン」のトークをします。2009年2月22日(日)午後1時からお茶の水谷口楽器で行われる「サンデー・アコーディオン・トーク」で筆者が「パリの空の下」についてお話しをします。この連載で触れた映画のシーンや録音も実際にご覧頂き、お聴き頂きます。